

3 遺構

(1) 造営前の地形と整地

南大門の発掘調査で確認した基盤層は、硬く締まった黄褐色～赤褐色の礫層である。この礫層はクサリ礫からなり、興福寺が立地する丘陵を構成している。

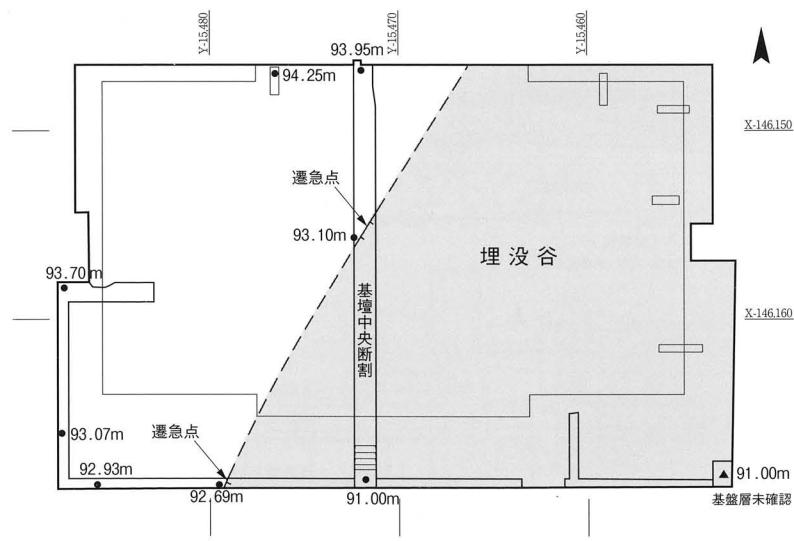
基盤層が最も高いのは調査区西北部で、その上面は標高約94.0mである。一方、東南隅では地表面から3.0m（標高91.0m）まで掘り下げても基盤層を確認できなかった。調査区西北部と東南隅との基盤層比高は実に3.0m以上で、実際はこれを大きく上回るであろう。つまり、南大門の東半には谷があったことがわかる（第5図）。

調査区南壁の土層観察では、Y-17,479付近に基盤層の傾斜変換点（遷急点）があり、これより東側が谷の西斜面である。同様に、中央断割ではX-145,155付近で基盤層の傾斜が変わる。この2点を谷の西端とみるならば、谷の主軸はおおむね北東～南西方向と割り出せる。すぐ北側の中門（1998年度）や東面回廊（2002年度）でも、基壇造営前に埋め立てた谷を確認している。中門では基壇の東半分で谷を埋めており、南大門とは造営前の地形が似ている。このことから、回廊・中門と南大門の基壇下にある谷は一連である可能性が高い。

南大門の基壇は、上述の開析谷を厚い整地層で埋め、平坦地を造成したうえで築成している。整地層は造営前の地形に応じ、北側・西側で薄く南側・東側で厚い。その層相にもとづき、下位から整地層①・同②と区別する。

整地層①は締まりの悪い土層で、基盤層由来の粘土塊が多く、遺物を含まない。粘土塊を多く含む橙色土と、これを含まない黄褐色土とが互層をなしているが、いずれも南（または東）へと傾斜している。その堆積状況から、谷を埋めるべく一気に積まれたとみえる。中央断割の南端部で、その厚さは約1.6mにおよび、これより東側でさらにその厚さを増すのが確実である。

整地層①によって谷を埋めたのち、その上には整地層②をさらに重ねる。整地層②はやや粘性のある均質な黄色土で、瓦片・土器片を含む。中央断割南端部での厚さは最大で約90cmである。その分布は調査区全域におよび、調査区の西端では基盤層を直接覆っている。その上面の標高は調査区北辺で94.4m、



同南辺で93.5mであり、南側がなお90cm低い。

(2) 南大門

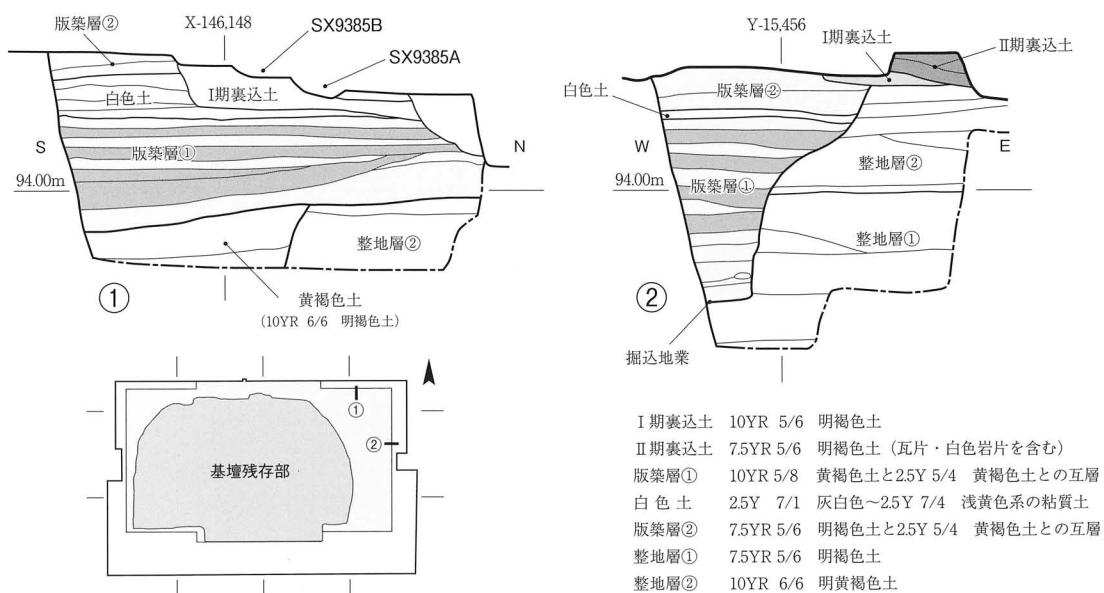
南大門SB9360 南大門SB9360は桁行5間×梁行2間の東西棟で、東西23.1m(78.0尺)、南北8.9m(30.0尺)に復元できる。柱間の寸法は、桁行の中央3間が4.7m(16.0尺)等間、両端の1間は4.5m(15.0尺)で、梁行は4.5m(15.0尺)等間である。中央の3間は門の通路にあたり、その幅は14.2m(48.0尺)である。『流記』では、門の規模を「天平記」・「延暦記」に基づき「間別一丈五尺。廣二丈八尺」、「寶字記」を引いて「長七丈八尺。廣三尺。加レ端。」と記す。「天平記」・「延暦記」の記事では、桁行は15尺等間、梁行は14尺等間となり、調査の結果判明した南大門の規模とは少し異なる。一方、「寶字記」の「廣三尺」が広三丈(30.0尺)の誤りとすれば、この数字は梁間総長の実測値に一致する。

①基壇

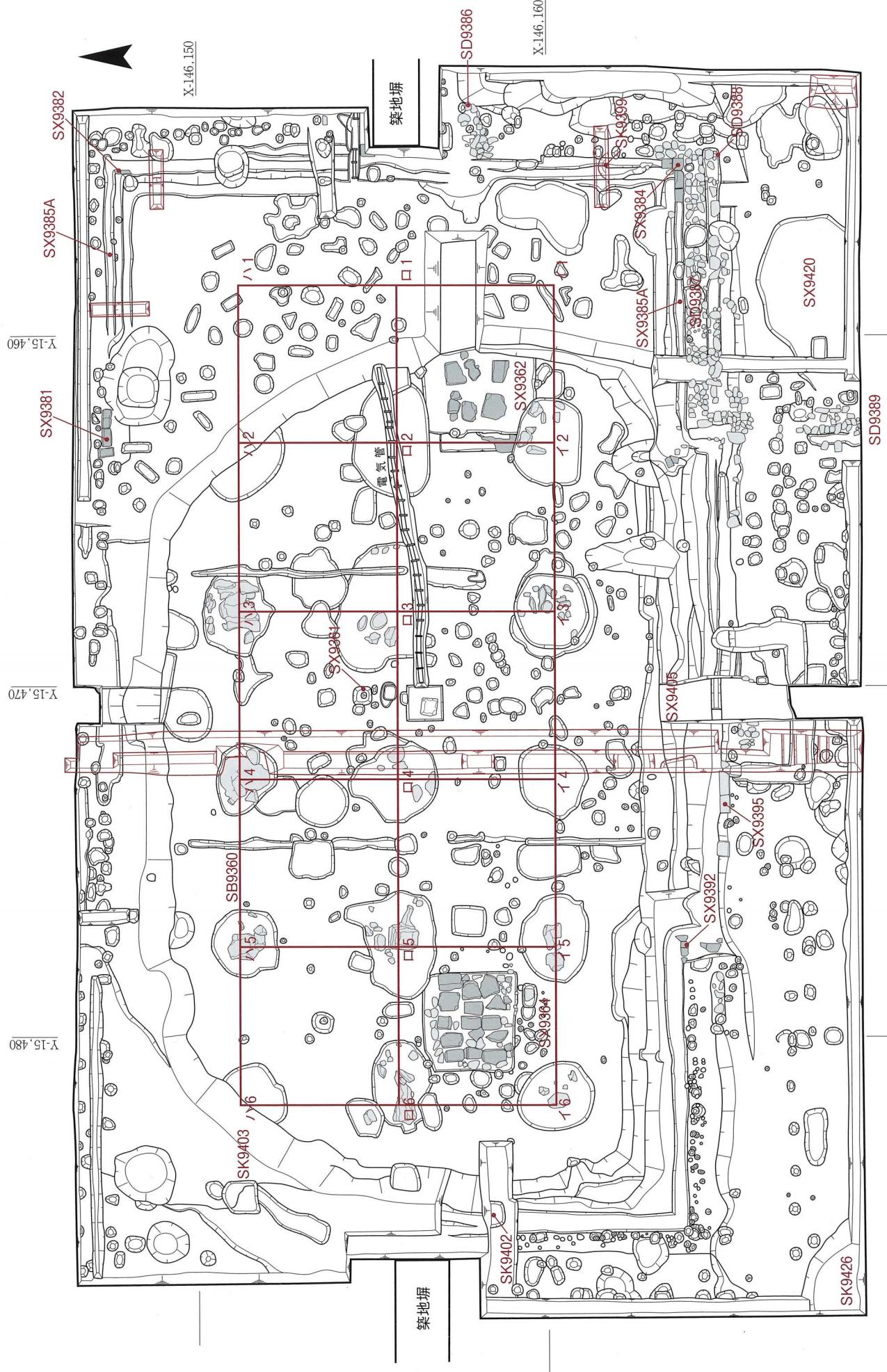
南大門の基壇幅は東南隅の地覆石SX9384の東辺外縁と、西端の地覆石抜取痕SX9385との距離から、東西30.8m(104.0尺)である。また、基壇の長さは北辺の地覆石SX9381と、東南隅の地覆石SX9384との距離から、南北16.6m(56.0尺)となる(地覆石およびその抜取痕は後述)。基壇心の座標は、X-146,155.7、Y-15,470.2である。

基壇の上面は表層約10cmが土壤で覆われ、礎石や金剛力士の台石は完全に埋没していた。礎石は上部が碎かれ、本来の高さをとどめない。また、礎石ハ4(後述)を支える根石が遺構検出面に露出し、その標高は95.53mである。根石の露出から考えて、基壇の上面は削平を受けたとわかる。基壇上の遺構検出面は標高94.35～94.50mである。

南大門では基壇造成に先立ち、掘込地業をおこなっている。その規模は基壇のそれよりやや小さく、東西28.0m、南北15.2mである。このため、掘込地業の輪郭を平面で検出できたのは西北隅の一部で、北端・南端および東端は断面調査で確認したのみである(第6図)。中央断面西壁の土層観察によると、掘込地業は整地層②の上面からで、その深さは約50cmである(第8図)。南下がりの地形にしたがい、掘込地業の底面も南へと傾斜している。



第6図 掘込地業北端・東端断面図(1:30)



第7図 遺構平面図 (1:150)

南大門の基壇土は4つの単位からなる。すなわち、下位から黄褐色土（厚さ約50cm）、版築層①（厚さ約110cm）、白色土（厚さ約20cm）、版築層②（厚さ約55cm）である。この層位的関係はどの場所でも同じで、版築層①および白色土の上面は版築過程の同一段階を示す。礎石の据付レベルは、後述のように版築層②の中位である。

おもに中央断面の断面観察から、基壇の築成過程は次のように復元できる。まず、掘込地業を黄褐色土で埋めるが、その厚さは一定せず、基壇中央部で厚く周辺部で薄い。このため、基壇東端付近では掘込地業が埋まっていない。黄褐色土は拳大未満の礫を混じ、わずかながら瓦片を含んでいる。出土した軒平瓦片は6671Eに属する。

次いで橙色土と灰色土とを交互に積み重ね、高さ約1.1mの土壇を築く。橙色土・灰色土はいずれも厚さ5cm程度で、最大で20層を重ねている（版築層①）。橙色土は粘土塊を多く含み、灰色土はやや軟質で砂質分に富む。したがって、両者の区別は容易である。橙色土と灰色土とはほぼ水平に重なっているが、基壇の外側に向かうにつれ各層ともに薄くなり、または途切れがちになる。このため、版築層①の上面は基壇中心部が高いマウンド状を呈していたようで、ことに基壇南部での高低差が大きい。

版築層①からなる土壇の上には、厚さ約20cmの白色土を敷く。この土層は白色粘土塊を多く含み、上下の版築層とは明瞭に区別できる。その上面はやはりマウンド状を呈するが、南階段付近には暗褐色系の土を足して土壇上の平坦面を拡張している。

その後、白色土の上位に黄橙色土・灰色土の互層（版築層②）を重ね、その途中で礎石を据える。各層は厚さ5cm程度である。黄橙色土と灰色土との違いは版築層①の互層ほど明瞭でなく、わずかな明度差で区別できる程度である。基壇上面は削平により失われているが、版築層②を積んで基壇の築成を終えたとみられる。

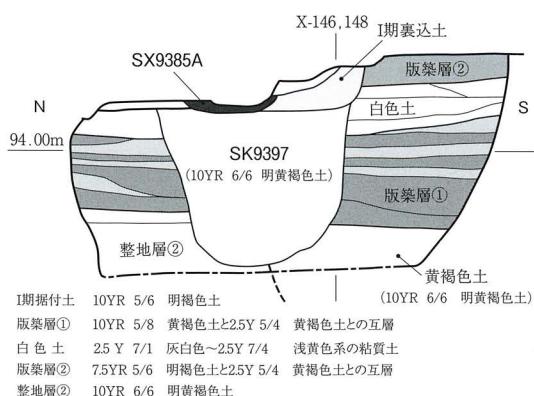
礎石とその抜取穴 基壇上では礎石とその抜取穴を15基検出した。記載の便宜上、東南隅の柱を基点とし、南から北へイ・ロ・ハ、東から西へ1～6と番付を与える。東端の柱列（イ1・ロ1・ハ1）は削平のため消滅している。礎石がよく残るのはハ3～ハ5の計3基で、すべて花崗岩である（第10図）。

いずれも礎石上半は碎かれており、全形をとどめないが、据え替えの形跡はなく、創建期のものである。残余の礎石はほぼ完全に抜き取られるか、その一部を残すのみである。

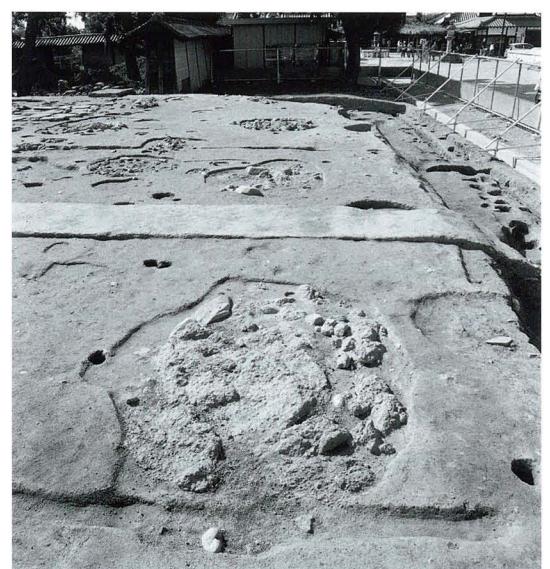
断面調査により、礎石ハ4は版築層②を積み上げる過程で据え付けていることが判明した。白色土の約15cm上位、標高約95.2m付近に根石を据え、礎石とその根石（三笠安山岩の巨礫）の周囲を橙色粘質土で固める。橙色粘質土は礎石ハ4の周辺が最も厚い（層厚約20cm）。礎石の据え付け後は黄褐色（Hue 2.5Y 5/4）系の版築層をさらに重ね、礎石の下半を埋めている。礎石据付穴は確認できない。

礎石イ4・ロ4・ハ2・ハ6はすでに失われているが、これらを支えたのも橙色粘質土である。礎石ハ4と同様に、橙色粘質土は白色土の約15～20cm上位にあり、層厚は最大で25cm。やはり礎石抜取穴の周辺にのみ分布する。橙色粘質土の下面は抜取穴イ4・ロ4・ハ6の近くで標高95.2m、同ハ2では95.0mで、その高さはおおむね一致している。橙色土は版築層のなかでの層位を同じくし、その下面是礎石据え付け直前の版築層上面を示すとみられる。

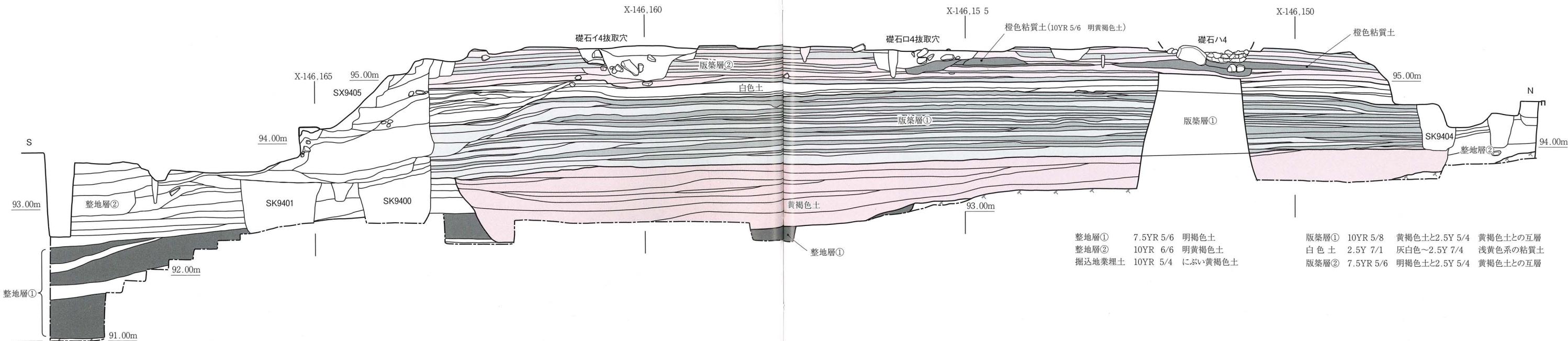
礎石抜取穴は不整形プランをもち、長径約2.2～3.5m。礎石ハ2・ハ6の抜取穴は遺構検出面から



第9図 SK9397断面図 (1 : 30)



第10図 磎石ハ列 (東から)



第8図 基壇断面図 (1 : 60)

約90cmの深さがある。埋土は灰褐色土で、抜取時に破碎した花崗岩片や、もとは根石とみられる巨礫を含む。この2基は基壇削平時に基壇土もろとも削りとられ、近代の盛土（茶褐色土）によって覆われている。

南階段SX9405 版築層の南辺を垂直に切り土したのち、新たに土を積んで南階段を造っている。階段の積土は瓦片・凝灰岩片や木炭を多く含み、基壇本体の版築層とは明らかに土質が異なる。階段の幅は門の通路幅（14.3m）に等しい。階段の出はわずかに残った踏石（花崗岩）を最下段とみる場合、基壇南端から約1.2mとなる。積土中から採取した木炭は、7世紀後半～8世紀初頭にかけての¹⁴C年代（測定番号IAAA-92542）を示す。

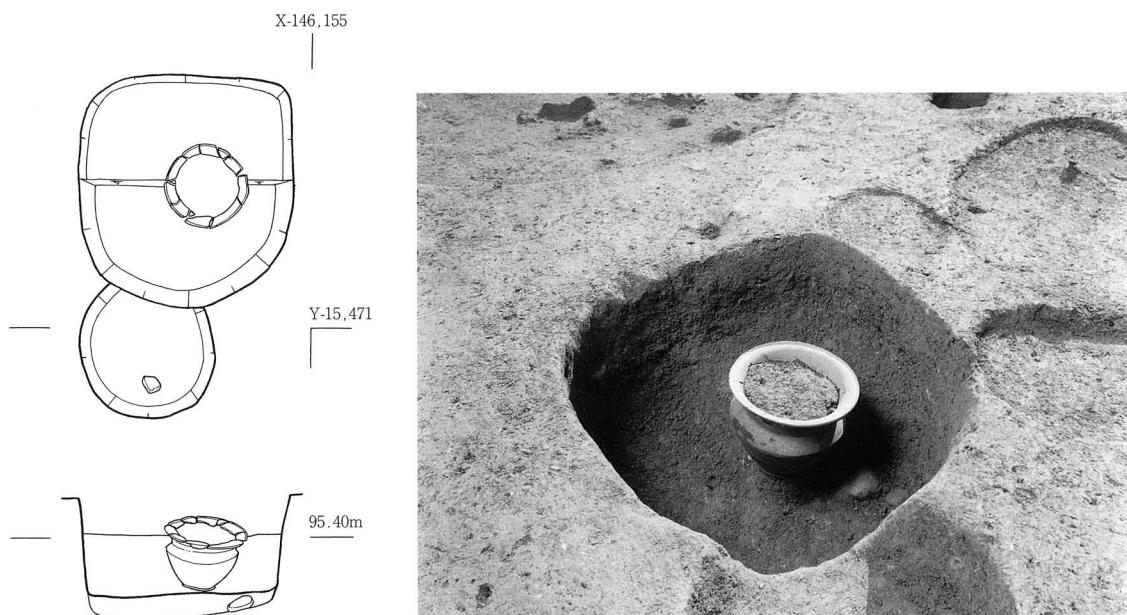
土坑SK9397・SK9398・SK9399 基壇北辺～東辺の断割調査で確認した土坑。SK9397は基壇土（版築層①・白色土）を壊し、凝灰岩Bの地覆石据付土に覆われる（第9図）。SK9398・SK9399は掘込地業の東端付近に位置する。

土坑SK9400・SK9401 南階段SX9405の下位にある土坑。中央断割西壁と、同断割の底面で検出した。いずれも整地層①まで掘り下げており、SK9400は版築層①を壊している。SK9400は一辺110cm、SK9401は一辺120cmの掘形をもつ。両者はその中心で1.8mを隔て、互いに関連する土坑とみられる。

土坑SK9402・SK9403 基壇西辺の断割調査で確認した土坑（第20図）。SK9402は凝灰岩Bの地覆石抜取痕跡の直下にある。版築層①を壊すが版築層②に覆われ、基壇築成の途中で掘削した穴である。SK9403は基壇土が残らないため平面検出できたもので、掘込地業の西端部にある。

土坑SK9404 中央断割西壁の北端付近で検出した土坑で、掘込地業の北端に位置し、版築層①を壊している。

土坑SK9397～9405は断割調査で確認したものが多々、これらが並ぶ状況を平面で確認したわけではない。しかし、これらの土坑は掘込地業の北端・東西端と南端付近に位置し、SK9397・SK9402が地獄谷溶結凝灰岩（『概報』IIにならい、以下「凝灰岩B」）の地覆石据付土の下位にあるなど共通点が多く、基壇築造段階における一連の柱穴であろう。その性格は明らかでないが、本書では南大門造営時の足場穴と考えたい。なお、類例には平城宮第2次大極殿SB9150を二重に囲む棧敷遺構SX9148がある（『平城



第11図 SX9361平面・断面図（1:20）

第12図 鎮壇具容器（須恵器広口壺）埋納状況（北西から）

宮発掘調査報告』X IV)。SX9148の柱穴は一辺60~90cmの方形掘形をもち、内側の柱穴が大極殿の地覆石据付掘形に重なる。SX9148との比較でいえば、今回発見のSK9397~9400・SK9402~9404が内側の柱穴、SK9401が外側の柱穴といえるかもしれない。

②基壇上の遺構

鎮壇具埋納遺構SX9361 基壇のほぼ中心部に位置し、一辺約60cmの隅丸方形を呈する(第11図)。この穴は中金堂院の中軸線上にあり、南大門の棟通り(基壇心)から北へ約90cmの位置を占める。検出面からの深さは50cm。埋土は黄褐色粘質土で、色調は基壇土のそれに近い。焼土、土器片・瓦片などは一切含まない。埋納穴の中心部からは須恵器広口壺(壺Q)が正位で出土した(第12図)。その出土状況から、本遺構は鎮壇具埋納遺構とみられたので、須恵器広口壺についてX線写真・高エネルギーX線CT写真を撮影したところ、壺の内部には和同開珎5枚、ガラス小玉13点が納入されていることが判明した。埋納穴の埋土はすべて採取し水洗篩別をおこなったが、鎮壇にかかる遺物は皆無であった。

金剛力士像(阿形像)基礎SX9362 三間幅の通路の東側、棟通り柱筋の南側にあり、柱イ1・ロ1(ともに削平)およびイ2・ロ2に囲まれる(第13図)。吽形像の基礎SX9364とは中軸線を介して対称の位置を占める。据付穴は南北3.3m、東西2.5m以上である。据付穴の深さは台石の上面から約45cmで、埋土は褐色土。土器片・瓦片および焼土・木炭を含む。吽形像基礎と同じく、据付穴に凝灰岩Bの切石を敷き並べたものとみえるが、東半は近代に削平を受け遺存しない。また、台石も多くは失われ、わずかに6石を残すのみである。台石上面の高さは標高95.44~95.50mである。なお、据付穴の西側に残る凝灰岩は、金剛柵地覆石の可能性がある。

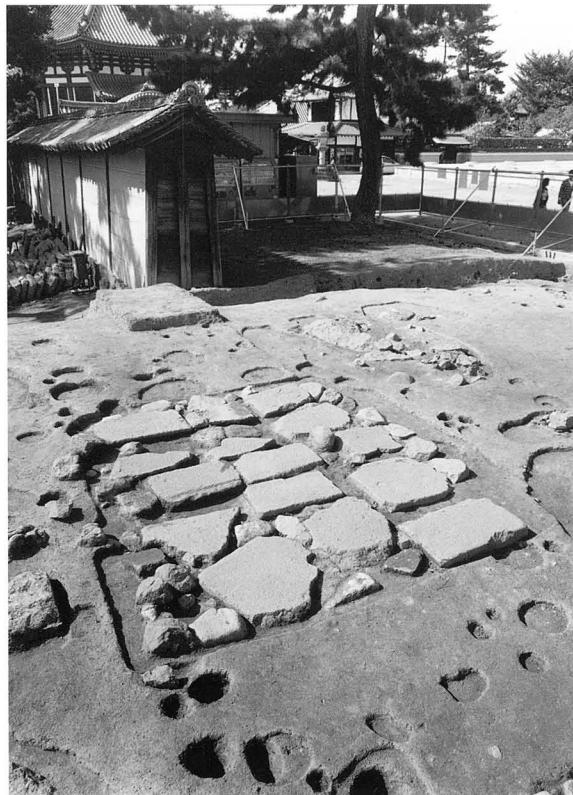
金剛力士像(吽形像)基礎SX9364 三間幅の通路の西側、棟通り柱筋の南側に位置し、柱イ5・ロ5およびイ6・ロ6に囲まれる(第16図)。据付穴は一辺約2.8mの隅丸方形で、その内側に凝灰岩Bの切



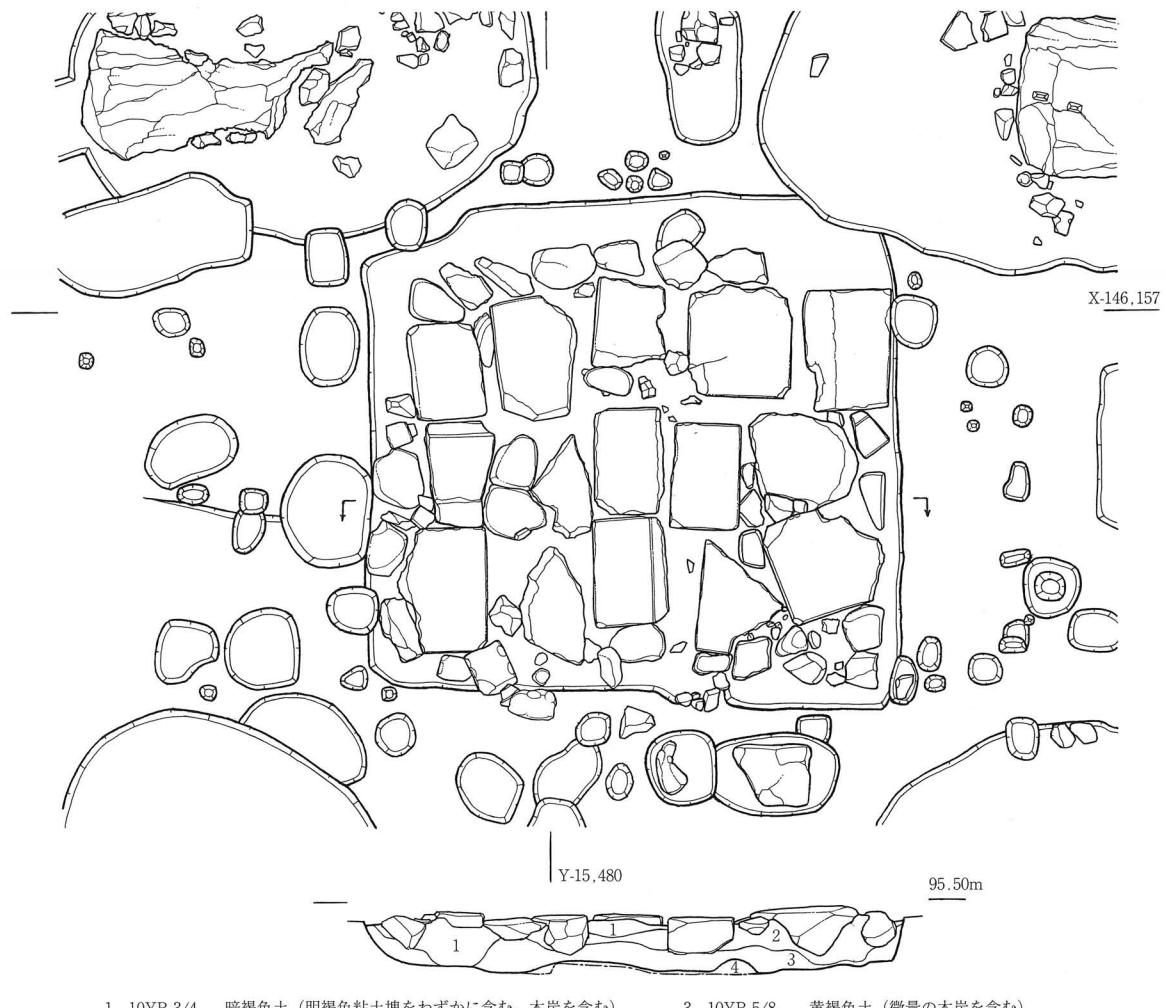
第13図 SX9362 (北東から)



第14図 SX9364据付状況 (南から)



第15図 SX9364 (南東から)



第16図 SX9364平面・断面図 (1:40)

石を敷き並べて金剛力士像の台石とし、その隙間は二上山産とみられる凝灰岩（『興福寺－第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ』興福寺、2000の「凝灰岩A」）の岩塊や安山岩礫・チャート礫で埋める。台石間には瓦片や焼土・木炭を含む暗褐色土が詰まるが、これは台石の設置後に嵌入した土である。この土から採取した木炭の¹⁴C年代は、10世紀前半（測定番号IAAA-92604～92606）と12世紀後半～13世紀初頭（IAAA-92608）とに分かれ、後者が第4次再建（1187）時の使用材とみられる。本書では後者の年代を重視し、SX9364が第5次焼失時（1277）にはすでに存在し、第4次再建以前に設置されたと考える。一方、台石の据付土は明褐色～黄褐色土で、瓦片などの夾雜物を含まず、嵌入土とは区別できる。

上の台石は東西2.60m、南北2.05mの範囲を占め、東西に長い。これは力士像が南面していたためであろう。台石上面の高さは標高95.43～95.49mで、SX9362にはほぼ等しい。一方、周囲にある礎石口5・口6の標高は95.52m、イ6のそれは95.58mである。本来の基壇上面はさらに高く、SX9364はこれより低い位置で力士像を支えたことになる。もっとも、台石が載せたのは力士像の岩座であって、台石の上に力士像が直接立ったとは考えがたい。

凝灰岩Bの台石は大きいもので15石を数え、いずれも被熱により赤色化した転用材である。多くは適

当な大きさに打ち割ったもので、打割時のノミ痕とみられるくぼみを残す例もある。その一部は羽目石であったらしく、断面L字形の仕口をもつものがある（第17図1）。断割調査の結果、台石の厚さは多くが約28cmで、その上面のみをほぼ水平に揃えていることが判明した。据付穴の底面には起伏があり、台石上面の高さを調整している。据付穴の深さは、台石の上面から約35cmである。

なお、元禄～宝永年間（1687～1711）に成立したとされる奈良奉行所管内要覧『おほゑ』（奈良県同和問題関係史料センター 1995）には「興福寺南大門間数之覚」という条があり、「二王御長」が一丈七尺五寸・「駒狗長」は七尺八寸と記している。つまり、享保焼失（1717）以前の金剛力士の像高は約5.3mである。

③基壇外装と雨落溝

南大門の基壇外装には、凝灰岩Bと花崗岩との2種の石材を確認した。前者は北階段の東側、基壇東北隅、基壇東南隅、南階段の西側などに、後者は南階段の一部に残るのみで、残余はすべて抜き取られている。抜取痕跡は基壇の西北部以外に残り、重複関係などから凝灰岩Bが古く花崗岩が新しい。

地覆石SX9381・9382・9384・9392 凝灰岩Bの地覆石で、基壇東北部～東南部にかけて部分的に残る。

SX9381（第19図）は北階段の東入隅部の地覆石で、3石がL字形に並ぶ。地覆石は長さ46.0～55.0cm、幅25.0～31.0cm。厚さは15.0cmで、天端の高さは94.59～94.66mである。基壇北辺を縁どる2石は東西に並ぶが、羽目石との接合部付近は破碎されている。西端の1石のみが北折し、北階段の東端をかろうじて教えている。

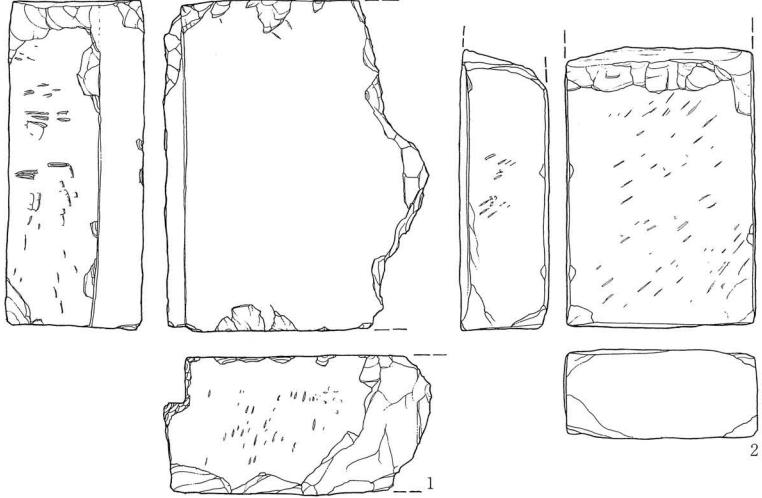
SX9382は基壇東北隅の地覆石で、1石分の破片がわずかに残る。本体は周囲の地覆石と同様に抜き取られ、一部が抜取溝の底部に残ったものである。

SX9384は基壇東南隅の地覆石で、4石がL字形に並んでいる（第23図）。橙褐色の裏込土が支持し、炭混じりの灰褐色土が覆う。その天端は標高93.13mである。東南隅の地覆石には深さ約1.0cmの仕口があり、隅束をおさめたとみられる。この外側は火熱のためやや赤味を帯びる。

SX9392は南階段の西入隅部の地覆石で、2石が残る。長さ42.0cm、幅22.0cmで、厚さは15.0cm。その天端は標高94.31～94.36mである。

地覆石抜取痕SX9385A 基壇東北部・東南部で検出した溝状の遺構で、凝灰岩Bの地覆石を抜き取った際の掘り込みである。埋土は灰色で、木炭片・凝灰岩B片を含む。木炭の¹⁴C年代は17世紀中葉を示し、この頃地覆石を撤去したとみられる。

石組溝SD9386 南大門の基壇にとりつく東築地塀の南雨落溝で、防災施設設置工事（1976）で検出し



第17図 SX9364台石実測図（1:15）

た南雨落溝とは一連の遺構である。川原石を2石並べて底石とする。その幅は約55cmで、上面の高さは標高約94.15mである。築地壠の地覆石を北の側石としたようだが、これは遺存しない。南に折れて南大門の雨落溝SD9387へと続くが、残るのはその曲折部のみである。

石組溝SD9387 南大門基壇の玉石敷の雨落溝で、基壇の東南端から南階段までの約7.5m分が残る。同時期に存在した地覆石SX9384の外側を縁どり、地覆石の天端からは約10cm下がる。底石は巨礫を2～3石並べたもので、幅約55cm。底石の高さは93.93～94.04mで、西側が低い。

東西溝SD9388 雨落溝SD9387のすぐ南側にある東西溝で、その幅は約40cm。長径約40cmの巨礫が落ち込む。巨礫は原位置をとどめず、SD9387の側石を転倒させた溝の可能性がある。

石組溝SD9389 南大門の南階段東端から南へと伸びる石組溝。上にみた雨落溝SD9387が南折したもので、1976年の防災施設設置工事でも検出している。東の側石は残存するが、西側のそれは抜き取られて残らない。溝の底石は安山岩などの巨礫で、その幅は約60cm。側石の天端からの深さは約5cmである。なお、今次調査では確認できなかったが、南階段の西端から南へと伸びる石組溝の痕跡が、防災施設設置工事の際に見つかっている。

南階段踏石SX9395 南階段の南端部に残る花崗岩の踏石で、南階段の最下段とみる。残存するのはわずか2石で、残余はすべて抜き取られている。東側の踏石は長さ121.0cm、踏面の幅27.0cmで、蹴上は約30cm。踏面の標高は94.28mである。西側の踏石は長さ45.0cmで、踏面の標高は94.30mである。

地覆石抜取痕SX9385B 基壇縁をほぼ完周する幅40cm程度の溝状遺構で、花崗岩の地覆石を抜き取った際の掘り込みである。埋土は近代盛土（茶褐色土）に類似し、花崗岩片・瓦片や木炭が多い。凝灰岩Bの地覆石抜取痕SX9385とはほぼ同位置にあり、かつ層位は上位である。

基壇外装の変遷 以上をまとめると、確認できる遺構に基づく基壇外装の変遷は次のとおりとなる。

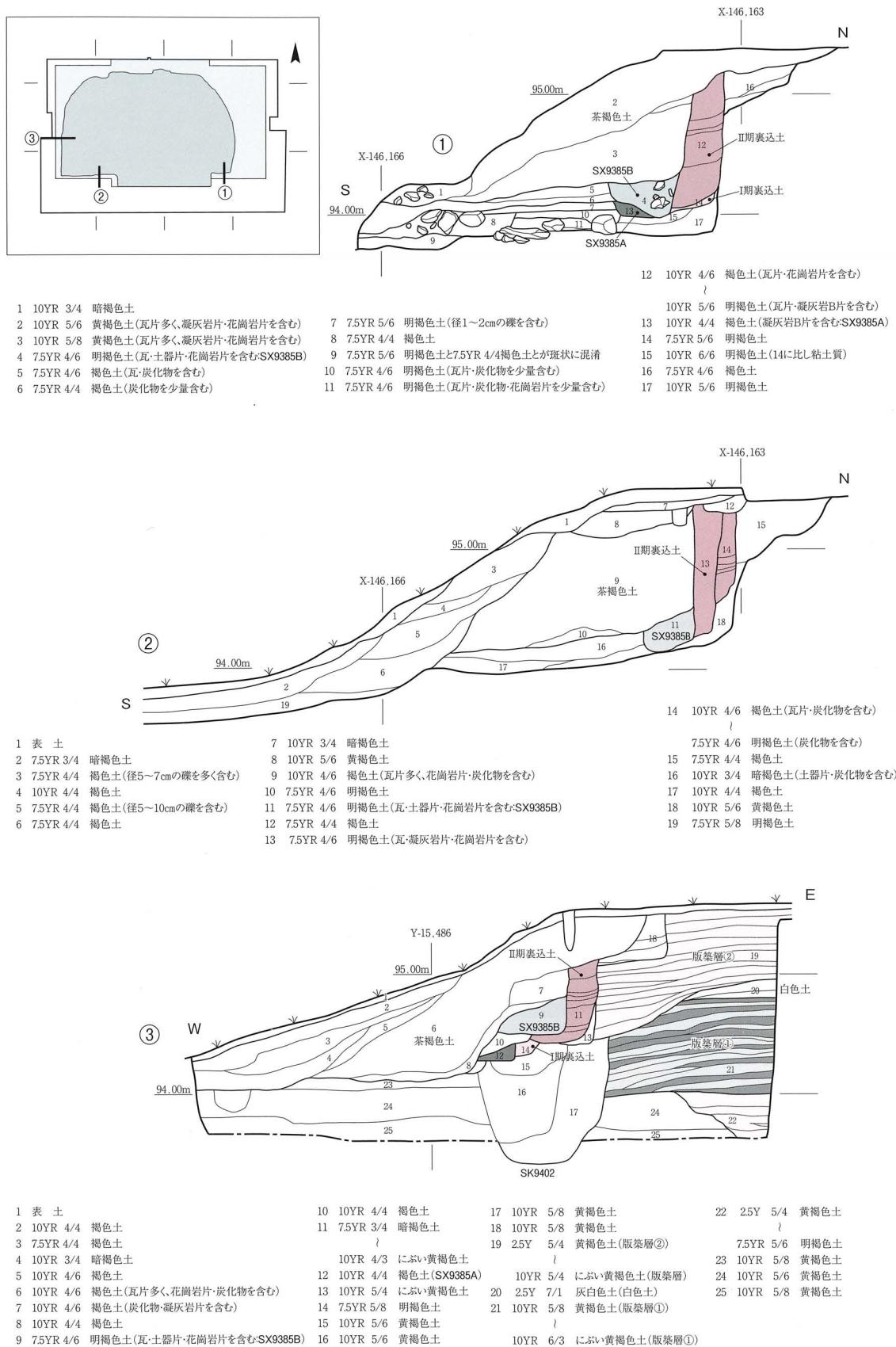
I 期 凝灰岩Bの地覆石SX9381・9382・9384・9392と、これらに伴う石組溝SD9387・SD9389の時期。地覆石は今回の調査で確認した最古のものである。地覆石の裏込土は橙褐色粘質土（I期裏込土）で、瓦片・土器片を含まず、木炭もごく少ない。南階段SX9405は積土内に多量の凝灰岩B片を



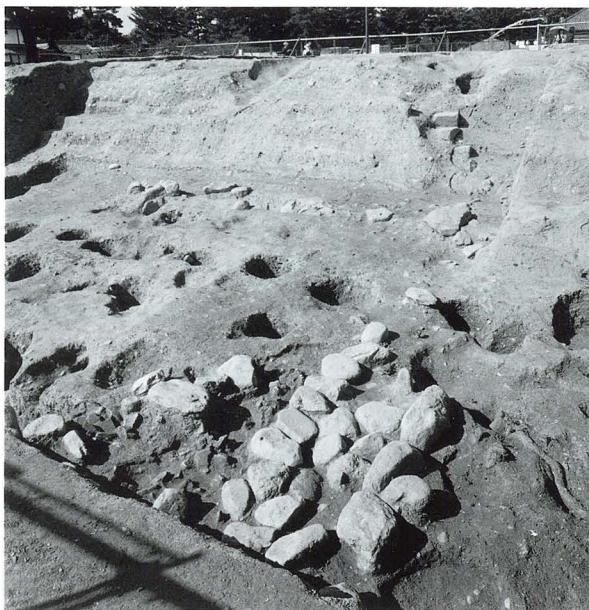
第18図 基壇東北隅（北東から）



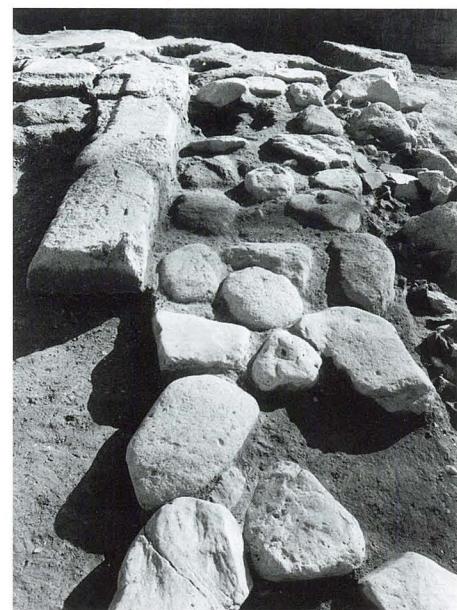
第19図 地覆石SX9381（北東から）



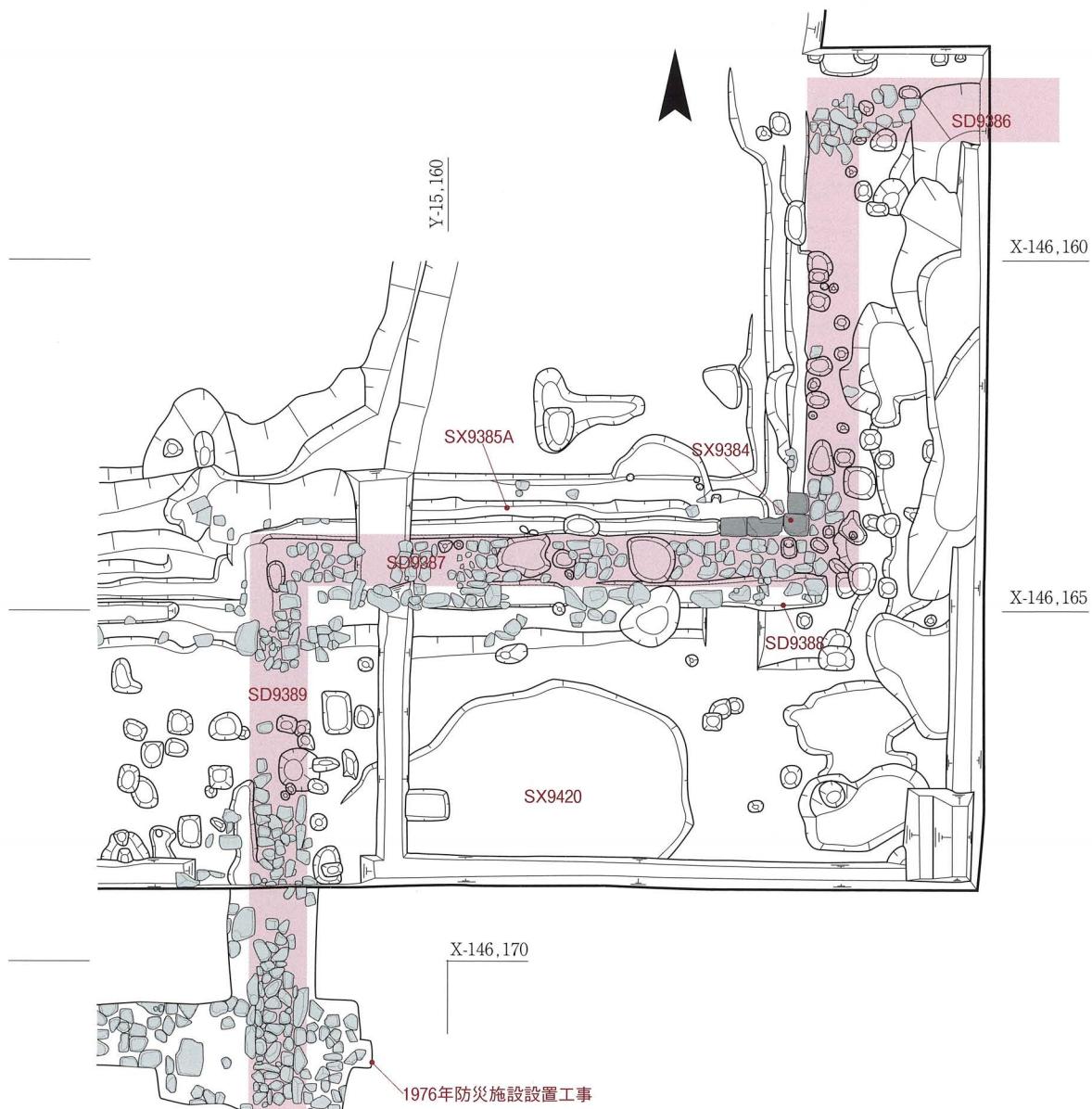
第20図 土層剖面図 (1 : 50)



第21図 石組溝SD9389（南から）



第22図 SX9384・SD9387（西から）



第23図 基壇南東部平面図（1:100）

含み、上掲の地覆石と同時期の築造とみられるが、大規模な改修を受けた形跡がなく、奈良時代まで遡る可能性がある。この場合、I期の上限は奈良創建時となろう。これに対し、創建時の中金堂では凝灰岩Aを基壇外装に用い、のちに凝灰岩Bに置き換えたことが判明している。南大門では凝灰岩Aの地覆石を確認できず、またその抜取痕跡も検出できなかったが、創建時の使用石材が凝灰岩Aであった可能性を否定できない。つまりI期の開始時期については、なお議論の余地がある。なお、地覆石据付土およびSX9405積土から採取した木炭の¹⁴C年代は8世紀初頭を示し、いずれの可能性をも否定しない。

II 期 花崗岩の基壇外装を用いる時期。花崗岩の地覆石はすべて撤去されているが、その裏込土が残存していた。II期裏込土は基壇東北部・東南部・南西部で確認した帶状の土層で、版築で築いた基壇の周囲をめぐり、I期裏込土を直接覆う。褐色土と暗褐色土との互層をなす部分もあり、木炭・瓦片が多い。II期開始の実年代は不明確だが、金剛力士像の台石が凝灰岩Bの転用材で、12世紀末（第4次再建）の設置とみられることから、このときを一応の上限としたい。ただし、これは凝灰岩B→花崗岩という単純な置き換えを考えた場合に限る。なお、II期裏込土に産した木炭の¹⁴C年代には、11世紀末～12世紀前半と15世紀後半とがあり、後者の年代は火災とは無関係な基壇の改修時期を示すようである。

III 期 花崗岩の基壇外装を撤去する時期。第7次焼失（1717）後にも壇正積基壇を描く資料（『大和名所図会』；18世紀末）があり、基壇の破壊は幕末以後と考えうことから、III期は明治期であろう。

（3）その他の遺構

瓦廃棄土坑SK9426 調査区西南隅で検出した不整形な瓦廃棄土坑。検出面は表土直下で、基盤の礫層まで掘り込む。深さは約80cm。土坑には平瓦・丸瓦が多く投棄され、埋土は赤褐色の焼土塊や木炭を多く含む。火災後の瓦廃棄にかかる土坑である。瓦の時期は奈良時代のものを中心に平安時代まであり、土坑は永承元年（1046）の第1次焼失時に掘削されたと考える。

瓦だまりSX9420 調査区東南部で検出した浅い瓦だまり（第23図）。南大門の東南方、南階段へと続く道路の東側にある。木炭・土器細片を含む灰褐色土⑤を除去した時点で検出した。調査区南壁の観察では、瓦層は厚さ約30cmで、多くの瓦が浅い窪地に堆積した状況をみせる。瓦は平瓦が多く、ところによりそれらが密集した部分もある。瓦は奈良時代のものが多く、平安時代のものを含む。埋土からは9世紀代の土器が出土している。

（4）近代の削平と修築

調査の結果、南大門の基壇は土取りで大きく削られたのち、多量の盛土によって土壇へと修築されていたことが判明した。基壇は東北部～東南部にかけての部分と、西北部とが大規模な削平を受け、このため礎石イ1～ハ1は消滅している。また、礎石抜取穴ハ2およびハ6は土取りのため半分を残すのみである。基壇の土取りは礎石を抜き取って以後のことで、明治期の可能性が高い。

一方、土取り後に残った基壇の周囲には、瓦片や花崗岩の岩片をきわめて多く含む茶褐色の土を盛り、本来の基壇規模をやや上回る土壇を築いていることも明らかとなった。この盛土（茶褐色土）は削平で縮小した南大門の基壇を直接覆い、東北部および東南部でとくに土量が多かった。茶褐色土中からは大正9年発行の一銭銅貨が出土し、土壇の築成がそれ以降であることを教えている。なお、調査前に撤去した花崗岩の石敷は、この茶褐色土の上に敷かれたものである。したがって、その敷設時期は大正9年以降となろう。

（森川 実）